

高岡市立博物館に親しむ会

KA

JI

MARU

鍛冶丸

第19号

令和8年
3月



「高岡市立博物館に親しむ会」の存続にご協力を

高岡市立博物館に親しむ会 会長 晒谷和子

令和7年(2025)の総会で親しむ会会長に選出いただき誠に有難うございます。

今を去ること13年前、“博物館を応援する市民ボランティア団体が是非とも必要”と博物館に熱い思いを抱かれる多くの市民の皆様の声が結集し、眼科医で医師会史研究家の飛見立郎氏を会長に押し立て、平成25年(2013)3月6日、「高岡市立博物館に親しむ会」設立総会が開催されました。高岡開町400年(2009)の郷土史探究ブーム冷めやらず、3部会を立ち上げて前途洋々の船出、魅力満載の活動がなされ続けています。

振り返りますと、設立2ヵ月余りで飛見会長がご逝去され、太田久夫元高岡市立図書館長へ引き継がれました。博識の樽谷雅好研修部長は2023年の大寒に急逝されました。新旧役員の交替もありましたが、幾つもの困難に対処しながら役員始め会員の皆様の献身的な努力によって、今日まで実り多い活動が地道に続き、約250名余の会員数を有したことに深く感謝申し上げます。

一方、当会の存続の一翼を担っているのは博物館事務局です。事務局の協力がなければ当会の事業の遂行は困難でしょう。ところが残念なことに、13年を経て職員数は減少し続けています。令和6年(2024)年1月1日の能登半島地震により伏木地区の震災被害が甚大で家屋や土蔵の倒壊により、貴重

な歴史資料が散逸・消失するおそれが危惧されました。被災資料レスキューとして収集し展示にいたる膨大な作業に追われているのが現状です。その上、同年11月には当会の世話に汗をかかれた廣瀬元館長がご家庭の事情でやむなく退職されました。

このような状況下ではありますが、本来、博物館が長い年月を経て所蔵した資料群と調査研究に励む学芸員の知見は、高岡市の宝であり大きな財産です。この地に育まれた歴史や文化に愛着をもつ市民は、その魅力を楽しむ各々がもつ情報を提供・共有する場を求めて博物館に集ってきています。その市民の熱い思いを汲み取って親しむ会へのご支援をお願いし、会員もまた高岡の歴史の解明に手を携え協力しあって、力強い活動がますます展開されるよう皆様のご協力を切に望むものであります。

(さらしや・かずこ)



郷土学習講座 第2講

講師 塩崎 久代氏(石川県近世史料編さん室 室員(文化財課専門員))

「前田利長の生涯と越中の真宗」を聴いて

令和7年(2025)6月28日(土)

高岡市立博物館に親しむ会会員 津田 周二

私の現役時代は金沢勤務が多く、親元に行くような気持ちで通勤していた。ある日、金沢尾張町出身の部下と百万石の偉大さについて話をしていたら、「そもそも川向こうは金沢ではなく、河北なんて言うのは単なる領地。まして高岡なんていうのは百万石に入れてあげているって感じかな。」とのこと。そこで、私の金沢に寄せる思いは「片思い」なんだと知らされた。

さて、「前田利長の生涯と越中の真宗」に移ろう。利長は守山城主、富山城主と越中の地をテリトリーとしており、特に高岡城築城においては重要な軍事拠点としての思い入れがあったように思える。

利長は、在地支配として伏木の勝興寺に制札を与え、略奪・破壊から保護することを約束する文書まで出している。民衆に入り込んでいる浄土真宗の力を利用して統治しようとする利長の意識が見えてくるようだ。真宗道場政策は、まさに地域の人々が自発的に集まってお勤めをしていくもので、隅々まで宗教(真宗)と政治をセットにして浸透・統制させていくことに尽力したものではないだろうか。

利長の発給文書は初めて見たが、ほぼ神尾之直まさしよ(図書)宛の高岡城築城関係の書状で、譜代の横山氏よりもよほどの信頼を寄せていたものと思う。これを全て読み解くと利長がどんな百万石を作ろうとしていたか分かるのではないだろうか。難解極まりない古文書を講師はすらすら読んでいたが、今後、歴史を覆す史実が出るのが楽しみでもある。

浄土真宗の西・東の分裂は、家康の戦略でもあるが、利長も西・東両方を承認し、のちに越中は半々

で仕分けられ、勝興寺を西派に瑞泉寺を東派にして、バランス良く争わず受け入れさせたのは流石である。また石川県の9割が東派とは知らなかった。この流れで幕府の寺請制度が始まり強制的に檀家に組込まれ、キリシタンの排除と民衆の戸籍管理が始まる。お布施でお寺の坊主も儲かり安泰だ。

五箇山の道場坊主市助に見られるように、藩が行き届かない山間地には、真宗の坊主、地域の有力者など据え置いて、塩硝、年貢米の取り立てをやらせるなど効率化を図っている。三代藩主利常に移っては、十村制度を立上げ、農から農への年貢米徴収で安定した統治体制が出来上がったことも勉強した。

本講座より越中の歴史の一端を学んだが、加賀百万石は越中があったからこそ成立したのだと声を大にして言いたい。この気付きに感謝し、私なりにいろいろ学び、自分のためになり良かった。歴史を勉強するのは、現代に生きる者の務めだと思う。

(つだ・しゅうじ)



「近世における古城、明治近代化における高岡公園の開設と地域社会」を聴いて

高岡市立博物館に親しむ会会員 土代 正美

高岡古城がどうして高岡古城公園になったのか？
の話の中で「なるほど」と思うことがたくさんあった。その第一は、当時の金沢藩が明治3年(1870)に民間へ一旦払下げを決めたが、明治5年(1872)に払下げを実施して払下げ先も決まったのに実際には払下げは公園設置の申請まで2年間留保していた。それからの当時の高岡のリーダーの対応の素早さである。

明治政府は、土族の救済のために「不要なものは払下げなさい」と言ったが「不要なもの」の定義が明確でなく、そこに外国からは開港だけでなく公園設置の要望が出てきて、文明開化の象徴として公園の設置が必要になってきた。

その動きにいち早く乗って一旦払下げたのを取り消すべく、射水神社の二上からの遷座と一緒に公園設置の申請をしたおかげで、日本で最初期の国指定の公園として残ったのである。

その功績者である服部嘉十郎[※]は十分準備して待っていたのだろう。なるほど服部さんは偉い。

当時の西洋の公園には博物館や動物園等があるので、古城公園もそのような心身回復の場に仕上がったのだろう。

次に、公園になるまでに城跡として明治まで維持管理してきた方法が「第二のなるほど」である。

幕末には門も外され、本丸以外は出入りで、三の丸・明丸・鍛冶丸は人が出入りをして畑作をしていた。一方、二の丸は庭のような景勝地になっていたとか。

なるほど、加賀藩は政治(領民統治)が上手い。
桑・茶・^{けやき}欒などの木が多く残っている理由も、住民に樹木管理と育成を任せて生計を立てさせる政策として、なるほどと判るような気がする。

今は、昭和40年の県定公園指定で乱開発にストップがかかったが、国指定史跡「高岡城跡」としての特長を有しているので、高岡市は城の見える化を進めている。

なるほど、高岡城跡を残すために先人はその時代時代で苦勞してきたことに改めて「なるほど」・「ガッテン」した講演会であった。(どしろ・まさみ)

※服部嘉十郎は、高岡の由緒町人、天野屋の13代目にあたる。嘉十郎は、明治6年(1873)9月、第17大区の区長(現在の市長)に任じられ、伏木の実業家、藤井能三や後の市長の鳥山敬二郎らと共に町民の思いをまとめ、公園指定の請願書を提出し、その結果、明治8年(1875)7月4日、正式に公園指定を受けた。



「高岡公園現況図」
(昭和23年~25年頃。高岡市立博物館蔵)

～歩く博物館～ 「高岡城もし戦わば」に参加して

高岡市立博物館に親しむ会会員 松原 吉孝

高岡城のことを詳しく知る良い機会だと思い参加しました。

現地を歩きながら講師の相本芳彦さんの説明を聞いたのでとてもわかりやすかったです。今回は特に鉄壁な守りについて多くのことを教えてもらいました。説明の中で強調しておられたことは「馬出」^{うまだし}「土橋」^{どぼし}「土塁」^{どるい}についてでした。高岡城の守りのことを知る上で大事なことだと思い、教えてもらったことを私なりにまとめてみました。

「馬出」について

本丸の周囲を二の丸・鍛冶丸・明丸・三の丸・梅林・小竹藪の6つの郭^{くわ}(本丸の堀の外に造られた陣地)で取り巻き、土橋でつないだ「連続馬出」と呼ばれる配置になっている。

「土橋」について

土橋は7つあり、本丸との距離がほぼ80mで銃撃戦を想定してある。(一般的な火縄銃の射程距離は200mほどで、殺傷力が高いのは80m～100mほど。)

鍛冶丸(博物館)から明丸(動物園)をつなぐ土橋は幅が2間(約3.6m)ぐらいと狭くなっていて敵の侵入をしにくくしてある。

「土塁」について

郭の周囲に堀を造る時に掘り上げた土砂で突き固めて盛り上げてあり、敵の侵入を防ぐようになっている。今でも動物園の周囲でその状況を見ることが

できる。

これらの説明を聞き、鉄壁の守りであったことがよくわかりました。

全体的な縄張(設計)の考え方として、西側には金沢城があるので、東側(中川側)の防備を重要視してあったとのこと。確かに、本丸の東側だけが深さ5m以上もある枳形堀^{まさがたぼり}と内堀の二重になっています。配置をみても鍛冶丸・明丸・三の丸を一直線にして、もし敵が東側の搦手口^{かづてぐち}(お城の裏口)から侵入しても明丸(動物園側)と三の丸(体育館側)から火縄銃で狙いやすくして東側の守りを固めていたのだと思います。

他にも、本丸からみて鬼門の方角である北東の堀の角(体育館前の駐車場下)の角を削り「災い=鬼」が入ってくるのを防ぐ方策がとられていたこと。石垣の石を割った時のクサビの跡(矢穴^{やあな})のこと。朝陽橋^{ちやうよう}(貫土橋^{くわんどぼし})の下に見られる石層のことなど多くの話を聞くことができました。

小竹藪をスタートし、2時間ほどの行程でしたが、新しい発見もあり、参加して良かったです。今度ゆくりと築城から416年の歴史の重みを感じながら、古城公園を歩いてみたいと思っています。

熱心にわかりやすく説明して下さった相本さんに感謝いたします。ありがとうございました。

(まつばら・よしたか)



「守山城の全容解明に向けて」を聴講して

高岡市立博物館に親しむ会会員 森 朝子

私は伏木で育ち、二上山は小学校の遠足などで親しんだ所です。嫁ぎ先は二上山の麓で二上射水神社は夫の父から孫まで関わり、里山や城山付近では山菜取りや散歩などを楽しんでいます。高岡徹先生のこの講座のチラシを見た時から、聴講を大変楽しみにしていました。

講演は越中三大山城の話から始まりました。守山城の地理的性格として水陸交通の支配拠点であり、城跡から砺波、射水の平野部を望む立地であることから、守山城小史に進みます。資料上の所見は、桃井氏から始まり、神保一族の支配から前田利長へと続きます。ここまでは耳にしています。

続いて、「二上山城の確認→従来の南北朝～近世初頭、守山城地一貫説に疑問」に入りました。以前から何故守山に築城されたのか。堀切等がある二上山には城が築かれなかったのかと疑問を持っていた私はわくわくしてきました。

先生は図面を多用し「古くは二上山を中心に主要ピークに城郭施設が設けられ、それらは尾根道によって結ばれ連携していたと見て取れ、二上山塊ネットワーク(仮称)の形成。城名により、南北朝～神保慶宗期は二上山頂部が城地。神保長職・氏張以降で現在の城山の場所とみる。田胡城は摩頂山にあり」と述べられたことに驚きました。今までもややもやしていたものが一気に晴れました。私にとって、この講演の一番の聴きどころでした。

築城地について素人考えで、①守山のほうが川に近く、人・物の移動が良い ②二上山は信仰の山である ③平らにする工事が易かった ④軍事的眺望が優れていたからとの思いに、「経済でしょう」とあっさり答えられました。射水市新湊博物館松山充宏先生の著書『桃井直常とその一族』に氷見での

戦が何回か記述してあります。それから時代が下ると北陸道しかない二上に比べ、街道が交差し、水運の便が良い守山は賑やかで潤っていたでしょう。

十年以上前に山城好きな友人たちと殿様道を歩きました。ジグザグですがしっかりした道で石垣用の石を運ぶため、二つ割の竹をレールのようにして牛に引かせたとの言い伝えに納得もし、屋敷跡もしっかり分かりました。尾根道は上り口は少し急ですが、後は明るく開け気持ちの良いコナラ林の中でした。摩頂山城は竹林を通り、なかなか見つけ難かったことが思い出されます。以前に先生が六尺程の棒を持ち、遊歩道から外れた所で調査されているのを見かけたことがあります。

万葉ラインの敷設や観音像工事等で、遺構が分からないところも多くあるようです。しかし、今後の課題と述べられた「二上山塊ネットワーク」の形成時期や詳細はドローンや古文書の新たな発見等で徐々に明らかになり、守山城の全容解明も進んでいくと信じています。今後の調査発見に眼が離せません。

最後となりましたが、高岡徹先生のこの講演に感謝し、ご健康と益々のご発展を祈念いたします。

(もり・あさこ)



伏木下町生まれ

高岡市立博物館に親しむ会会員 福岡 清隆

1. はじめに

私が生まれた家は伏木古国府にありました。俗に下町と呼ばれ旧道に面していました。向かいには上り坂で石段の道がありました。小学生の時、祖母の葬儀のため、この伏木下町の家へ行った頃だったと思いますが、父から「この辺の土地はみんな勝興寺のものだ。」と聞かされ、なぜ遠く離れた勝興寺のものなのか疑問に思っていました。

2. 勝興寺について

(1) 古国府への転住

「府之分一円令寄進候事」天正12年(1584)12月神保安芸守氏張(1528-92)が勝興寺宛に発給した制札の最初の箇条です。神保氏張は戦国時代末期、能登畠山氏の意向を受けて守山城に入ります。越中で織田・上杉の争いが激しくなると氏張は信長の妹を妻とするなど織田方となり、佐々成政の腹心として活躍します。富山城にいた佐々成政が守山城主神保氏張に命じて、氷見庄の神保領の内「府之分一円」の地を勝興寺に寄進させました。秀吉と対立した成政が一向宗を味方に引き入れるため、伏木に勝興寺を招いたのです。

(2) 勝興寺領

府之分一円とは、奈良時代に越中国府と称した地域一円を指すものに相違ありません。その実態はまだ明確になっていませんが、台地上のかなりの範囲を含んでいたと考えられています。寺内町を形成したのは、勝興寺門前から港口に至る古国府地区に限られます。古国府地区は勝興寺に近いところを上町・中町、港に近いところを浦町、河岸の低地を下町と呼びます。集落の全域は寺地、つまり広義の境内に営まれ、低地部分は外周に堀を巡らし、台地部の縁辺は石垣で防護され、城砦都市の構造をなしていました。「寺社御印物等写」(加越能文庫)によれば、境内は15,000歩(坪)、門前居屋敷8,000歩ほど、畑地8,000歩ほど、田地1,500歩、道862歩でその長さ272間、合計33,300余歩が勝興寺領でした。

3. 下町について

下町は文字どおり、台地上の俗称「高町」に対する台地下の「下町」の意味ですが、もうひとつ、このあたりが地引図のなかの字名で「紺屋下」と

なっており、その「下」も二重写しになっていると思われます。

(1) 資料調査

令和7年2月15日、古文書ボランティアの活動終了後、博物館宛申請書を提出し次の2点の資料を閲覧しました。

① 「土地台帳(伏木古国府町)」明治28年(1895)博物館所蔵

私が生まれた家の地番の69番地を探したところ、「字紺屋下第六十九番ノ壱 土山澤映」と記載されたページを見つけました。この土地台帳によれば69番地は字紺屋下であり、70番地から字下町になっていました。

「土山澤映」について調べたところ、勝興寺23代住職であることが分かりました。法名「土山廣輝」、諱「澤映」、院号「金剛院」、生没年「1845-1905」、在職年「1855-1905」、略歴「西本願寺執行長、権少教正、廣濟(22代住職)の子」。

② 「富山県射水郡伏木町大字古国府町地引絵図面」明治43年(1910)博物館所蔵

先にこちらの資料を見て、上に勝興寺、中央あたりに上下方向に参道が描かれ、参道下の方で旧道と交わり、旧道沿い少し先に「六十九」を見つけた時「あった」と心のなかで叫びました。六十九と七十の間あたりに上向き(西行)の道が描かれてました。

(2) 現地調査

『たかおか 歴史との出会い』(高岡市制100年記念誌編集委員会編)に「JR氷見線伏木駅前正面の勝興寺参道に入ると、駅前大通りに沿う家並と、それに背中合わせとなっている古国府下町旧道筋の家並との境に、やや広めの溝のあることがわかる。」(同書204頁)と書いてあったので、令和7年1月27日、現地調査に行きました。我が家のあったあたりは家並が続き、家の裏へ回れませんでした。旧道沿いを探している時、倉庫へ物を取りに戻った住人に会い、「昔、家の裏に用水が流れていませんでしたか」と尋ねると、「用水は今もある。雨水が流れている。」と自宅兼倉庫の裏にある用水まで案内してくれました。用水の幅は約2.5m、深さは約70cm、水は流れておらず底に土砂が溜まっ

ている状態でした。

同書によれば、「この溝は、かつて古国府寺内町の外周にめぐらされていた堀の名残りで、小矢部川河口の伏木・古国府共有の舟着場に通ずる舟路でもあった。」のです。我が家の裏に堀があったことを確認しました。

4. おわりに

明治28年(1895)の伏木古国府町土地台帳から、当該土地の所有者は勝興寺住職土山澤映であったこと。明治43年(1910)の大字古国府町地引絵図面に旧道沿いに「六十九」の表示がありそこから西に延びる道が描かれ、この特徴が60年前の記憶と一致すること。家の裏に堀の名残を確認できたこと。以上3点より、伏木下町にあった我が家の所在地は、勝興寺寺内町の古国府下町であり、土地は勝興寺のものに相違ないと結論に達しました。

(ふくおか・きよたか)



古国府寺内町外周の堀の名残り



高岡市立博物館に親しむ会 事務局より

～呈茶席～ 春4/26(土)・5/17(土)・5/24(土)・6/7(土)
秋10/4(土)・10/11(土) 計6回開催

会員様よりボランティアを募り、茶庭の剪定やお客様のご案内など、運営を支えていただきました。

お忙しい中、先生方をはじめ、多数ご協力・ご参加いただき、誠にありがとうございました。



～版画講座～ 11/21(金)・11/28(金)の2日

版画講座—木版画で年賀状を作ろう—は、3名の方に参加いただきました。

1日目は今年の干支「馬」をモチーフに、木版の下絵から彫りまでを終えました。

2日目は、色を重ね試行錯誤しながら、心を込めて版画を摺りました。木目やほかしが引き立つ素晴らしい年賀状に仕上がりました。

水上先生、ご参加の皆様、ありがとうございました。



● 令和7年度 **高岡市立博物館に親しむ会** 事業報告 ●

総 会		4/17(木)13:30~14:00
講演会	「近年の新収蔵資料について」 講師：仁ヶ竹 亮介氏(高岡市立博物館 主幹)	4/17(木)14:00~15:30
研修部会事業	「高岡城・公園をあらためて見つめる」	
	第1回 座る博物館「古文書にみる高岡城跡・公園の歴史」 講師：仁ヶ竹 亮介氏(高岡市立博物館 主幹)	6/21(土)
	第2回 歩く博物館「高岡城もし戦わば」 講師：相本 芳彦氏(フリーアナウンサー・研修部会長)	9/13(土)
	第3回 座る博物館「守山城の全容解明に向けて」 講師：高岡 徹氏(とやま歴史的環境づくり研究会 代表)	10/25(土)
	第4回 座る博物館「古写真にみる高岡の歴史」 講師：宇川 恵里氏(高岡市立博物館 主査学芸員)	12/6(土)
ワークショップ部会事業		
呈 茶 席	春4回 4/26(土)、5/17(土)、5/24(土)、6/7(土) 秋2回 10/4(土)、10/11(土)	いずれも11:00~15:00
版画講座一木版画で年賀状を作ろう		11/21(金)、28(金)いずれも10:00~11:30
広報部会 鍛冶丸19号発行、クリアファイル作成		
	第1回 6/11(水)、第2回 8/6(水)、第3回 11/19(水)、第4回 2/4(水)	
「古城公園展望台」屋上開放ボランティア		4/4(金)、5(土)いずれも13:00~15:00

クリアファイルを作成しました!

図柄は「高岡中古之図と今」(大好評のうち完売した、令和4年度作成のデザインに加筆し再作成しました。)
ミュージアムショップで販売中。(1部 200円)
※令和8年度(2026)会員登録時、配布いたします。



● 令和8年度 **会員募集のご案内** ●

あなたも会員となって、郷土への理解を深め、市民に親しまれる新しい博物館づくりに参加してみませんか。

- 主な活動
 - ・博物館の諸活動の協力、支援
 - ・高岡地域の歴史と文化に親しみ、互いに親睦を図る活動
 - ・ミュージアムショップの運営 ほか
- 年会費
 - ・一般会員 1口 1,000円
 - ・賛助会員 1口 5,000円 *お一人さま 何口でも可
- 会員の特典
 - ・企画展、特別展、講演会などのご案内
 - ・各種行事への参加及びご案内
 - ・会報「鍛冶丸」の送付
 - ・郷土学習講座等の受講料割引
 - 《賛助会員のみ》
 - ・図録の進呈
 - ・館内及び博物館HPでご芳名の掲示 (ご希望者のみ)

- 申込方法
 - 入会申込書に必要事項を記入のうえ、会費を添えて「高岡市立博物館に親しむ会」事務局へお越してください。入会申込書は「高岡市立博物館に親しむ会」のホームページに掲載しております。
 - 郵便振込をご利用の場合は、振込用紙「払込取扱票」に以下の項目をご記入の上、郵便局にてお振込みください。なお、振込手数料は各自でご負担をお願いいたします。*電信振替については、ホームページをご覧ください。

親しむ会では、各種部会のメンバーを募集しています。

1. 研修部会 事業企画、行事等サポート
2. 広報部会 会報「鍛冶丸」の作成
3. ワークショップ部会 呈茶席運営・サポート



- ・口座記号：00760-8
- ・口座番号：100749
- ・加入者名：高岡市立博物館に親しむ会
- ・金額：年会費の金額
- ・ご依頼人：郵便番号、住所、氏名(ふりがな)、電話番号、性別、年齢

高岡市立博物館に親しむ会 会報「鍛冶丸」第19号
 ■発行日 令和8年(2026)3月15日
 ■編集 高岡市立博物館に親しむ会 広報部会
 (部会長：土肥、部会員：宇於崎、般若、松原、水上、山井、四津井)(五十音順)
 ■事務局 〒933-0044 高岡市古城1-5 高岡市立博物館内
 TEL 0766-20-1572 FAX 0766-20-1570
 URL <https://www.e-tmm.info/> E-mail info@e-tmm.info